

3年 世界史A 課題(5/22-28)

*教科書P66-67 を読みながら、空欄(1)～(52)に適する語句をルーズリーフに書きなさい。ただし、文中に空欄に入る語句が出ている場合がある。

*ただ空欄を埋めることだけに注力するのではなく、文章の意味をできるだけ把握しながら進めてください。

*1学期の世界史Aの初回の授業で提出すること。

イギリスの絶対主義(P66)

16 世紀後半の(1)は(2)を確立して宗教的混乱を收拾し、イギリス絶対主義の全盛期をきずいた。彼女の時代に(3)が発展し、海外発展をとげていくための国力がたくわえられた。1588年の(4)で(5)をやぶり、(6)年に特許会社である(7)を設立した。また、(8)らが活躍して文化も栄えた。

イギリス革命(P66)

エリザベス1世の没後、(9)出身の(10)と(11)は、議会を無視して(12)にたつ専制的な政治を強行した。1628年、議会はチャールズ1世に(13)を提出したが、翌年、王は議会を解散した。1640年、課税の必要にせまられて議会在招集されると、議会と王との対立が深まり、(14)年には内戦がはじまった。議会派には(15)が多かったため、この内戦は(16)とよばれている。

内戦は議会派の勝利に終わり、1649年チャールズ1世は処刑され、独立派の指導者(17)が(18)をおこなった。彼は武力を背景にきびしいピューリタンの(19)を断行し、また、(20)とスコットランドを征服した。しかし、クロムウェルは国民にうとまれ、彼の死後、(21)が即位して王政が復活した。王は専制政治をおこない、旧教化をすすめようとした。議会は(22)を文武の官職から排除するために(23)を制定して対抗したが、やがて、議会内に国王支持派と批判派が生まれ、それぞれ、(24)・(25)とよばれるようになった。これが(26)のはじまりである。

次の国王(26)も専制政治と旧教政策をかえず、危機感

ここからP67

を募らせたトーリー・ホイッグ両党は、(27)年、王を追放し、新教徒である王の長女夫妻を(28)からまねいて翌年に王位につけ、(29)を定めて議会主義の原則を確立した。この王位交代は、(30)なしにおこなわれたので、(31)とよばれている。ピューリタン革命と名誉革命をあわせて(32)という。

政党政治の発展(P67)

専制的な王権に抵抗した二つの革命により、議会の地位は高まり、財政や軍事力も議会の管理下におかれた。その後、トーリー・ホイッグ両党のうち、議会で多数派を占めた政党が内閣を組織する(33)が発展した。18世紀前半に、事実上の(34)とされる(35)のもとで、内閣が議会に対して責任を負う(36)がはじまり、「(37)」という近代立憲君主国の原則が形成されていった。

フランスの絶対主義(P67)

フランスでは、16世紀後半に(38)とよばれた(39)がカトリックと対立して(40)となった。国内は混乱したが、(41)をひらいた(42)が1598年に(43)を出してユグノーに(44)を認め、内乱を終わらせた。(45)は宰相(46)を用いて絶対主義の体制をととのえた。続く(47)は典型的な絶対主義の君主であった。宰相(48)時代に王権強化に抵抗する貴族の反乱(49)が鎮圧されると王権は安定し、1661年に新政を開始すると強大な権力をふるった。彼は王権新種説をとり、財務総監の(50)が徹底した(51)政策をすすめた。パリ郊外に造営された(52)では絢爛豪華な宮廷生活がくりひろげられ、フランスはヨーロッパの文化的中心となった。しかし、領土拡大をめざす数々の対外戦争の失敗が国家財政を圧迫した。